

研究タイトル：

ヒトの言語能力の起源をめぐってー認知的構文文法の観点からー

氏名： 酒井 啓史 / SAKAI Hirofumi E-mail： hirofumi.sakai@tsuruoka-nct.ac.jp

職名： 助教 学位： 修士(言語学)

所属学会・協会： 日本英語学会、日本認知言語学会、日本言語学会、英語語法文法学会、日本英文学会、筑波英語学会

キーワード： 理論言語学、英語学、構文文法、言語進化、動詞意味論、非定形節

技術相談

提供可能技術：

- ・構文文法全般、特に英語の動詞に関わる現象
- ・構文スキーマとその生産性に関すること
- ・言語能力と一般認知能力の関係
- ・言語進化に関すること



研究内容： 人間言語の本質とされる階層性は本当に言語固有の能力に由来するのか？

英語では、動名詞が動詞の補部位置に生じることがあるが、この動名詞補文における意味上の主語は主節主語と同一指示の場合もあれば、非同一指示の場合もある(指示指標は下付き文字で表す)。

- (1) He_i tried _{i/*j}frying the mushrooms. [同一指示]
- (2) The psychiatrist_i recommended _{*i/j}getting away for a week. [非同一指示]

このような動名詞補文に関する同一指示性の背後にどのようなメカニズムが働いているのか、長年理論言語学では議論されてきたが、デフォルトとは異なる同一指示性を示すもの(以下、非典型的の同一指示性)は、必ずしも十分に扱われているわけではない。例えば、動詞 *try* は通常は同一指示となる動詞だが、文脈を整えると非同一指示となる。

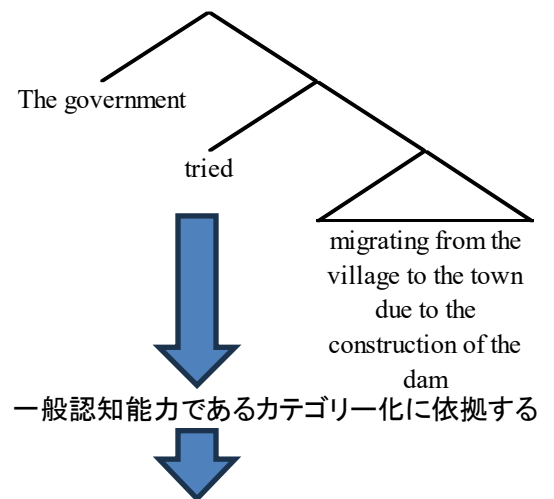
- (3) The government_i tried _jmigrating from the village to the town due to the construction of the dam.

(Sakai (under review))

こういった非典型的の非同一指示となるものについては、語用論の問題とされ、関心が大きくは払われていないか、関心が払われている場合でも、包括的かつ原理的な説明にまでは至っていない。これに対し、拙論 Sakai (under review) では、酒井 (2021) や酒井 (2024) を発展させ、構文文法の観点、特に上位構文の役割に着目して、当該同一指示性について原理的説明可能性している。簡単に言えば、**(言語固有の能力ではなく)一般認知能力であるカテゴリー化に由来する意味と形の対である構文**によって、当該(非)同一指示性は認可されているという説明である。

ここで着目したいのは、典型的に階層性(≡埋め込み構造)がみられる(1)–(3)が一般認知能力の産物である構文によって認可されているという点である。一般に、階層性は人間言語に普遍的であるがゆえに、人間言語の本質とされるが、これまでの研究では、階層性が言語固有の能力に基づくものなのか、言語固有の能力ではない一般認知能力に基づくものなのかについては必ずしも明らかになってはいない。上述したように、階層性が一般認知能力由来の構文に動機づけられるものだとなれば、ヒトの進化における言語能力の獲得をめぐる研究にも、貢献するものになる。

というのも、ヒトの言語能力の起源をめぐっては、人間言語の本質である階層性を手掛かりに研究が進められてきた背景があるからである。もっと突き詰めて言えば、**人間言語の本質たる階層性が構文を形成する能力であるカテゴリー化に依拠するのであれば、ヒトの言語能力の起源はカテゴリー化という一般認知能力を言語という概念を扱う領域に応用した結果である可能性を示唆している。**



4 質の高い教育を
みんなに



提供可能な設備・機器：

名称・型番(メーカー)

名称・型番(メーカー)	